

赤石山脈荒川大崩壊地および広河原の1760年代古文書記録

松原輝男

名古屋大学情報文化学部

Arakawa Gigantic Rock Slide and *Hirokawara* Wide Dry River Bed in the
Akaishi Mountains; Records in 1760s Old Documents

Teruo MATSUBARA

School of Informatics and Sciences, Nagoya University

Abstract

The forest-areas called "*Okureki-yama*" in Ina-gun of *Shinsyu* (now a part of Nagano prefecture) was under the direct control of the Tokugawa Shogunate throughout the early modern Japan (1600-1868; the Edo period). After the fifth large scale logging of *Okureki-yama*, during 1760-1764, the village officials of *Ohkawara*-village offered a document about trees on *Okureki-yama* in 1766. In the document they reported that bigger *Hinoki* cypress (*Chamaecyparis obtusa*) and Japanese arbor vitae (*Thuja standishii*) trees were lost from the forest due to rock slides, floods and stand-decaying. The finance ministry (*Kanjo bugyo-sho*) of the Tokugawa shogunate had some doubts about it, and investigated the village officials and the state of the forest. Nowadays the sites investigated are called Arakawa *dai-hokaichi* (Arakawa gigantic Rock slide) and *Hirokawara* (wide dry river bed formed on the waste-filled valley). Two illustration maps of these sites in 1763 and 1769 have remained in the storehouse of the one-time chief official of the village. This paper deals with geographic features of these sites shown by the illustration maps and related one.

Key words: 荒川大崩壊地(Arakawa gigantic rock slides): 赤石山脈(Akaishi mountains): 山岳古絵地図(Old illustration maps of mountains): 江戸時代(The Edo period)

信濃国伊那郡大河原村および鹿塩村(現在は二村合わせて長野県下伊那郡大鹿村)には、江戸時代を通して、大河原山および鹿塩山と呼ばれる幕府直轄林(御樽木山、御林とも呼ばれる)があった。これら直轄林は、赤石山脈(南アルプス)標高3,000m以上の赤石岳や荒川 岳などの西側一帯にあり、現在は国有林である。大鹿村には日本列島を分断する大断層である中央構造線が南北に通っており、不安定な地質ゆえの災害が起こりやすい。大河原村と鹿 塩村は千村平右衛門の預かり所の一部で、江戸時代を通して樽木成村として特別な年貢の納め方をしていた。17世紀には、これら両村にある直轄林からサワラ *Chamaecyparis pisifera* を原木とした材木(樽木、くれき)を大量に切り出した。18世紀になってサワラが枯渴したこと、および度重なる土砂崩れや水害などの災害により村は困窮すると、これら両村は樅と榎(モミ、ツガ類)など諸木の伐出を願って、それら山仕事や敷木の収益により年貢を納めて生計を営んだ。大木が鬱蒼と生い茂っていた原生林も、これらの樹木伐採により18世紀の後半までには、小木苗木ばかりといって良いほどになる(1-3)。

これらの幕府直轄林の状況は、それぞれの樹木の種類ごとに一定の大きさ以上の立ち木の概数が村方により調査され、「書上帳」あるいは「御林帳」の形で千村平右衛門支配の飯田御役所を経て勘定奉行所へ報告されていた(2)。明和三年(1766)の大河原山『御樽木山御吟 味二付木品寸間大積り書附』はこのような書上帳の一つであったが、それまで1,000本程あると報告されていた檜は山崩れや谷抜けで埋まってなくなってしまったこと、黒部は立ち枯れてしまったことを書き留めていた。樽木の原木になる榎と共に、檜、黒部は特に重要な樹種であったから、それまでに切り出していない樹種であるにもかかわらず無いという報告書には疑問が出て、明和六年(1769)に実地見分も含めて厳しい吟味をうけた(3)。この時の実地見分地が、荒川岳西側の「荒川大崩壊地」と、その崩壊に起因して形成された埋積谷で「広河原」として現在知られている場所であった。

これら荒川大崩壊地と広河原を中心として描かれた、宝暦十三年(1763)と明和六年(1769)の絵図2通(7,9)が、長野県大鹿村前嶋家と飯田市美術博物館にそれぞれ残されている。それぞれの絵図からは当時の地形などについて違った情報が得られるものである。ここに描かれている山々は材木伐出作業の「深山嶮岨」な現地であり、そのような土地に至る 道筋をどのようにたどって入り込んだかの記録もある。前報で、「荒川大崩壊地は別としても、少なくとも谷抜、山崩によって広河原が形成された時期は1743年から1760年の間であろうということになる」と述べた(3)。このような時代の「深山嶮岨」な地の絵図は珍しいものであろう。それら絵図は大断層と樹木の過伐の影響も加わって非常に不安定な地帯で生じた山崩れ谷抜けを記録しているものである。ここでは、それら絵図が示しているものを現在

の地形などと比較すると共に、当時の人々がそのような「深山嶮岨」な地へとどのように入山したかについても述べる。

1. 広河原に至る

赤石山脈(南アルプス)の主峰赤石岳(標高3,120m)に発する本岳沢と、荒川岳(前岳 3,083m)からの荒川が合流するあたりに、荒川大崩壊地と称されている崩壊地から主として供給された岩石が堆積して、広大な「広河原」が形成されている。河原の幅が約200～300m、長さは直線距離で約1.5kmほど、標高約1,300から1,600mである。これより上は荒川岳前岳のほぼ頂上から一気に崩れている大崩壊地である。流れは高山沢や板谷沢、楯村沢など多くの沢を合流して小渋川になり(図2)、さらに青木川と塩川を合流し、やがて天竜川にそそぐ。これらの川が近世大河原村と鹿塩村の御樽木山から切り出した材木の運材に重要な役割を果たした。

信州伊那郡大河原村の代々名主前嶋家の屋敷のある大河原中心部辺りから広河原までは直線距離にして15kmほどである。明和六年(1769)に飯田御役所役人を案内して、山抜け谷崩れなどによる檜などの埋木の実地見分地広河原まで至るには、当時の実感としてはもっと遠いところであった。明和六年六月三日付けの、大河原村名主右馬之丞の倅である兵左衛門と他の村役人から飯田御役所にあてた文書『乍恐書付を以申上候』(明和六年『萬日記』(6)に記された文書控え)には、次のように記されている。

「…去月上旬より日々降続候大雨故、小谷川所々より流出、本谷通之道悉ク欠崩、御用木仕出候時節作り候道橋茂跡形無御座、新規二道橋作不申候而ハ、山奥江通路難仕候二付、山内巧者成ル日雇高役人足大勢差加、本谷通川々四五十ヶ所之場所ニハ橋を掛、嶮岨難場人跡絶候所二者、階子等をつけ不申候而者、所之者さへ難参山内二御座候得共、道橋階子等出来之上御出不被成候而ハ、御見分茂難成候、尤檜黒部有之候荒川山崩之場所ハ極山奥ニ而、村居より凡十里斗も御座候二付、天氣かわり次第取掛り候而も日数廿日程も相掛り不申候而ハ、右道筋出来不仕候…」

ここで「御用木仕出候時節」とは宝暦十年(1760)から明和元年(1764)に大河原村が御用木伐出を請け負って材木伐出をしたことである(宝暦御用木請負)(1,2)。

当時も現在も大河原集落から見て東方面約4kmの釜沢が最奥集落である。ここからさらに見分地になった広河原までは、現在の登山ルートでさえも小渋川を二十カ所以上も渡渉しなければならない難路で、実感としては「凡そ十里ばかり」と言ってよい。

図1は、明和六年大河原村前嶋政房(兵左衛門)による『萬日記』(6)の六月二十一日付けのページに描かれている、見分地までの道筋と谷や沢の名称の兵左衛門覚え図である(縦14cm、横35cm)。この萬日記に書かれていることを中心にした見分の様子については前報に詳述した(3)。前述の釜沢集落のある小河内沢(古河内)辺りから、見分地である広河原とそこに建てられた宿泊小屋および井戸川(いどがハ)、荒川(荒川山)、小渋川左右岸に合流する主な沢が書き込まれている。見分地は「桧ヶ原嶋」と呼ばれていたようだ。図2は現代の地形図をもとに図1の絵図の範囲を描いたもので、沢の名称は地形図や登山ガイドマップなどを参考に書き入れてある。これと比較するとこの「御見分道筋絵図」は、方角と沢間距離などが多少違うことを除けば、良く描かれているものである。木樽、本岳沢と福川(絵図では福沢となっているが、南沢と福沢を逆に記している)などの沢の名称に今日との違いがある。

2. 明和六年広河原絵図

明和六年の檜などの埋木地現地見分の際に、埋木地とされている広河原で、広河原を中心にした絵図を現地見分奉行が描いた(3)。その絵図は後日のためとして村役人にも写しが渡された。その写しが、飯田代官所役人谷沢幸内と井上柳八および御足軽近藤伴左衛門の名のある、広河原を中心とした絵図『明和六丑六月廿二日荒川山見分之節右場所二而見分絵図』(7)(前嶋家文書:飯田市美術博物館蔵)である。大きさは縦30、横40cmで、黒墨一色で描かれている。見分の際に広河原に立って周囲を見回しながらこの絵図を書いたと記録されている(3)。図3にその絵図を掲げたが、文字は絵図とほぼ同じ位置と大きさで入れ替えてある。図4は、現代の地形図を元に広河原を中心にして、絵図と同様の方角と範囲を示したものである。ここでは絵図で示されている広河原の範囲、すなわち広河原木屋の下流「巾三丁程」と書かれている辺りから荒川と井戸川の合流点辺りまで、標高約1300mから1600mまで、を点線で示してある。絵図では広河原が周辺の峰々までの遠近と比較して誇張されている。最外側の線は、地形図をなぞってみるとほぼこのようにえがけるので、荒川岳や赤石岳など周辺の山々の稜線を表現しているように思われる。この線は信州鹿塩村、遠州および信州遠山(現在の上村、南信濃村)との国境の輪郭線でもある。これら輪郭線の内側に、谷と谷の間の尾根を描いていると思われる同様な山形輪郭線があり、この内側には樹木を表現している線点が描かれている。上記広河原は点線で囲まれ、内側は大石の河原を表現する点が打たれている。広河原の巾は三丁、及び二丁半、登りそれぞれ十丁で二つに区切られ、上流側が檜の埋木地として見分地になった(3)。ここで

「丁」とは「町」(360尺、約109m)のことと思われるので、巾が約250mと300m、長さ約2kmであり、今日の広河原とほぼ同じ規模の河原を記録している。後述する荒川大崩壊地は「荒川入山抜押出」と記入されている。

これらの見分地については、大河原村村役人達から飯田御役所谷沢幸内と井上柳八あて、見分実施後の明和六年六月廿三日付け『差上候山内御見分之覚』の中で説明されている。この文書は明和六年『萬日記』(6)中に記された文書控えであるが、六月廿四日と十一月十四日の日付の日記中に控えられたもの2通があり、後者が前者の改訂版である。ここでは見分地の地形や植生をより良く説明している改訂版にしたがって述べる。

先ず、宝暦御用木請負の五年間で多くの樹木を伐採した跡地を調査して、木数などの現状を報告したが、谷抜け山崩れ、立ち枯れや風雪折れにより無くなってしまったとした檜や黒部の減木数に疑問が出て現地調査をすることになった顛末が記されている。

次に「大河原山之義、東西里数不相知、深山嶮岨山奥へ外二通路無御座候二付、本谷通路 作被仰付、鹿塩村数右衛門右差配仕、從御役所茂田中小源太殿御越被成、御路谷通橋々并難 場嶮岨階子等も出来仕候」と、隣村数右衛門差配で、いわば技術指導者として田中小源太も 派遣され、見分地までの道作り、橋や梯子(階子)をかける工事が終わった、と記されている。そして現地見分になり、現地までの道すがら、高山、中山、奥木樽など遠見で折れ木や立ち枯れ木等多くあることが見分された。檜と黒部は荒川山という所にあると以前から伝えられていたが、谷抜け山崩れで埋木になったことを報告した結果、現地見分を行うことになった。その場所は「本谷筋より左二当り、山崩谷抜押出し河原有之候得共、埋木之木類等も不相見、石ノ下二有無之儀ハ難御斗御座候」と述べられている。さらに「本谷筋ハ南沢福沢と申所之奥より流出申候得共、雑木立高峯ハ草木難相分相見、御用立可申木立とハ御見請不被成候二付、是より本谷大嶮ノ方へハ御登り不被成候」と述べられているので、赤石岳本谷方向には見分に登って行かなかったことがわかる。

そして次のように広河原と荒川大崩壊地について記述されている。
「右荒川山被成御覧候処、先ツ広河原と申処、登り十町程幅貳百間及之大石河原有之、夫より相続一段高ク荒川山崩押出河原、御上り道十町程幅貳百間程之大石山河原二御座候、右場所先年ハ木立有之谷二而、荒川山崩二而押埋り候哉、古木之義ハ難御斗候、夫より相続欠崩候欠口迄ハ、嶮岨を傳被参候義も候ハバ、凡壺里程ハ可達御座候得共、通路ハ難仕趣申上候得共、御見渡し東西へ十二三丁南北へ十五丁程ハ可達御座候、然者年々雪消或ハ大雨等之節、追日東西へ欠崩、広狭様躰替り可申場所と御見請被成候、尤右押出し大石河原之崎二雑木之小木生立候様子二而ハ、近年之山崩斗とハ不被思召候、此辺二檜黒部等之類木も無御

座候、尤何程相懸り埋木掘起可相成義共御積難被成、大石共重々押累り有之、広キ大石山河原二御 座候」

先ず広河原は登十町程巾貳百間(巾が約360m)に及ぶ大石の累々たる河原であること、続いてさらに上部に荒川山が崩れてできた河原が十町余巾貳百間余であることを述べている。この場所は以前に木立があったところだが今は荒川崩れで埋まってしまい見当たらない。それより奥が荒川大崩壊地で、雪解けや大雨の時に崩れ、地形が変わりやすい所であると見請けられた。大石河原の最上部辺りに雑木の小木があるので、近年の崩れだけで埋まったとは言えないと述べられている。

現在の地形では、荒川と井戸川の合流は標高1500mのあたりであるが(図4)、明和六年の絵図ではもっと上流地点で合流しているように見える。則ち、上記の広河原に続く荒川山 登り道十町余の大石河原の上部、標高1600mあたりで合流し、河原の南側をほぼ西へと流れ 下り、フク沢と南沢(福川と本岳沢)と合流している。それより下流も、絵図では広河原の南側を流れているように描かれている(図3)。広河原の北側に埋木見分の際の宿泊木屋がある。

現在の荒川と井戸川の合流点から上部、標高1500～1600mの河原には樹木が生育している。本岳沢との合流点より上部にも樹林が展開しているが、ここには広河原小屋があり、大鹿村 からの赤石岳登山路の入り口になっている。後に述べるように、ここは宝暦十三年(1763)当時の赤石岳登山路としてすでに使われていたようである。

3. 宝暦十三年広河原および荒川大崩れ絵図

信州伊那郡住人前嶋右馬之丞政俊の署名印形があり、「宝暦拾三未年八月朔日釜沢嶽一見、信州駿州一覽いたし候二付、見分絵図認之申候、大河原村御樽木山嶽惣絵図一枚并きしゅ之改入」と表書きされている絵図がある(9)(図5)。「きしゅ」とは木種のことか。宝暦十三年は前記宝暦御用木請負による諸木伐出の五年間のうちの四年目であった(2)。この絵図が描かれた目的や提出先などについては今の所不明である。前嶋政仁による宝暦十三未年一月二日から十二月晦日までの『萬日記』(5)は、未年分の御用及び村用日記書留である。ここにはこの釜沢嶽行についての記述はなく、七月十三日の記述以後4ページの未記入空白ページがあり、九月十五日から記述は再開している。この間が上記釜沢嶽へ出かけた時期であろう。この空白ページは後日に見分について記述する意図があったがそのままになってしまったのではなかろうか。

この絵図は縦40、横60cmで、一部茶と白色に着色されている。明和6年絵図と同じく、大河原村御樽木山釜沢本谷嶽方面が描かれているが、ここ

では荒川嶽と荒川崩れが図示されている。沢の名称は福沢と井戸川が記入されている。点が打たれている範囲は主に広河原を意味し、他の範囲は樹木を表す模様でおおわれている。沢は二重線で、尾根部稜線は一重線で描かれている。井戸川と荒川の合流の位置と、本岳沢を合流した小渋川の流れは、明和六年の絵図に描かれているものとやや違っているように見え、むしろ今日の地形図にある流れとよく似ている。現在の地形図と比較すると、遠近などについて広河原がやや誇張されていることを除けば、方角も、線で表現されている稜線もかなり正確に記されている。

最も興味深いのは、荒川嶽の頂上から広河原の最上部までの荒川大崩壊地が描かれていることである。ここを源流とする流れは荒川である。他にも大小の崩壊地を描いていると思われる黒塗りの部分が見られる。「釜沢本谷嶽」とは赤石岳のことだが、この上部には森林を示す模様が記入されていない。これは森林限界より上部の草地などを表現していると思われる。荒川嶽も釜沢本谷嶽も、頂上や稜線が1～2cm巾に白い顔料で縁取りしてある。これは冠雪を表現しているのかもしれないが、旧暦八月朔日あたりの冠雪は考えにくい。色付けされた村絵図(8)の場合も「嶽」である高山は冠雪のように白色に塗られているので、これが「嶽」を表す定法かもしれない。

この絵図の内部には次のような付紙がなされている。(a)釜沢本谷嶽と荒川嶽の稜線の間の位置に「嶽二而雨乞拝場并未八月見分きしゆ之改候所」、(b)本岳沢(釜沢本谷および福川)と小渋川の合流点よりやや上流の本岳沢河原の「本谷きしゆ改此所二改置候」、(c)本岳沢と荒川の間の尾根最下部の広河原に「嶽山へハ此山より上ル」、(d)本岳沢と小渋川の合流点の北側広河原内に「此所未年中木屋立候」、の4枚である。(a)の雨乞を行う場所とは今日の百間平の辺りと思われる。(c)の嶽への道は今日の赤石岳への登山路と同様で広河原小屋がある位置である。(d)の木屋の位置は明和六年の絵図と同じである。

中央構造線に添った山岳地帯には巨大崩壊地が多い。大鹿村内では荒川大崩壊地や、明治31年及び昭和四年に大災害が発生したという奥茶臼山上沢上流崩壊地があり、鳶ヶ巣の崩壊や二児山のサルナギなども崩壊年代不明の大崩壊である。他にも大小の地滑りや崖崩れが多い(1)。これらは中央構造線外帯側堆積岩地域の崩壊地だが、赤石山脈の東側にも、大井川流域の赤崩れ、ボッチ薙、千枚岳崩などの巨大な堆積岩地域崩壊地がある(4)。大鹿村の村内を南北に切る中央構造線の内帯側地域では、昭和36年(1961)に大崩壊して大災害が発生した大西山の崩壊は重要である。これらの大崩壊の主要な原因は、中央構造線という大断層に付随する大小の断層と、主に中央構造線の東西にある破碎帯が非常に不安定であることであろう。これに加えて1600年以来約150年も樽木の原木サワラを

切り出したことと、1700年前 後(元禄年間)から幾度も大量のモミ類ツガ類などを切り出したことが、地質の不安定さを拡大させたであろう。ここに述べた荒川大崩壊地もいつから崩れ始めたかは不明であるが、現在に至るまで常に大量の岩石、土砂を小渋川、天竜川に供給し続けている。前報(3)で示したように、少なくとも文書記録に基づく限り、広河原の一部は1740年代から1760年頃に形成されたと考えられる。一度の大崩壊で大きな河原が形成され得ることは、上記の上沢上流崩壊地や大西崩れなどによる大きな地形の変化の例も同様である。文政十一年(1828)の前 嶋八郎九郎正弼による『当子年御用村用記録』(10)の7月28日付け記述にも、「市岡寛蔵様 井上金四郎様、去ル口御樽木山御見分ニ御越被遊候節認候山絵図一枚、他ニ先年荒川山谷抜之節認候山抜絵図一枚メ二枚、此度湯浅様井上様へ御たし申候」とある。市岡および井上は文政八年(1825)に樽木山見分に出役している(1)。ここに述べられている絵図2枚はいずれもみつかっていない。ここでいう「先年」とはいつなのか不明だが、前述したように雪解けや大雨の度に大小の崩壊が発生したということであろう。現在でも大雨の際に大岩石の転げ 落ちる轟音が広河原小屋に避難した人々を脅かすと聞く。

前嶋家文書の調査では、飯田市美術博物館の桜井弘人氏と、下伊那郡大鹿村の前島正介氏にお世話になりました。お礼を申し上げます。

文献

- (1) 大鹿村誌 上、中、下巻 昭和59年(1984) 大鹿村誌編纂委員会
- (2) 松原輝男 信州大河原・鹿塩両村御樽木山の近世における林相 その1: 諸木伐出の 歴史に基づく検討 情報文化研究 (1997) 第6号: 39-70
- (3) 松原輝男 信州大河原・鹿塩両村御樽木山の近世における林相 その2: 明和三年の大河原立木数報告始末 情報文化研究 (1998) 第7号: 11-44
- (4) 千木良雅弘 風化と崩壊 近未来社 1995

前嶋家文書(飯田市美術博物館蔵)

- (5) 宝暦十三年 萬日記
- (6) 明和六年 萬日記
- (7) 明和六年六月廿二日 荒川山見分之節右場所ニ而見分絵図
- (8) 寛政元年二月 千村平右衛門御預所信州伊那郡大河原村絵図

大鹿村大河原前嶋家所蔵文書

(9) 宝暦十三年八月 大河原村御樽木山嶽惣絵図

(10) 文政十一年 当子年御用村用記録 前嶋八郎九郎正弼

図1 明和六年御奉行様方御見分道筋の谷沢名称覚え図(明和六年『萬日記』(6)六月二十 一日)(原図縦14cm、横35cm)

図2 小渋川奥地諸沢

図3 明和六年荒川山見分絵図(7)

文字はほぼ同じ位置と大きさと入れ替えてある。(原図縦30cm、横40cm)

図4 現在の広河原と周辺地形図

図5 宝暦十三年大河原村御樽木山嶽惣絵図(9)

文字はほぼ同じ位置と大きさと入れ替えてある。(a)～(d)は付紙の位置で、書かれている文字は本文参照。(原図縦40cm、横60cm)

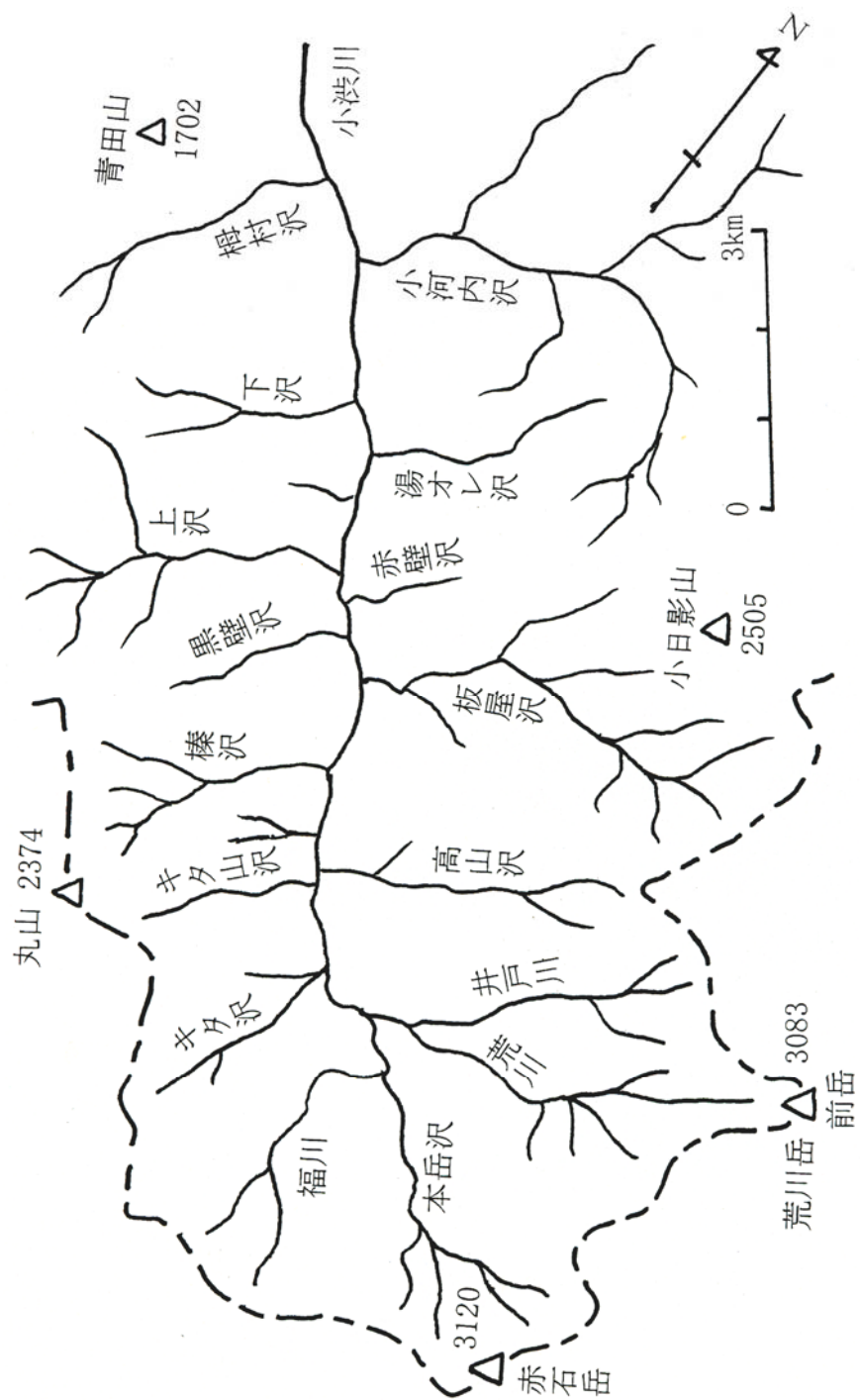


図2 小渋川奥地諸沢

谷沢幸内
井上柳八
御足輕
近藤伴左衛門



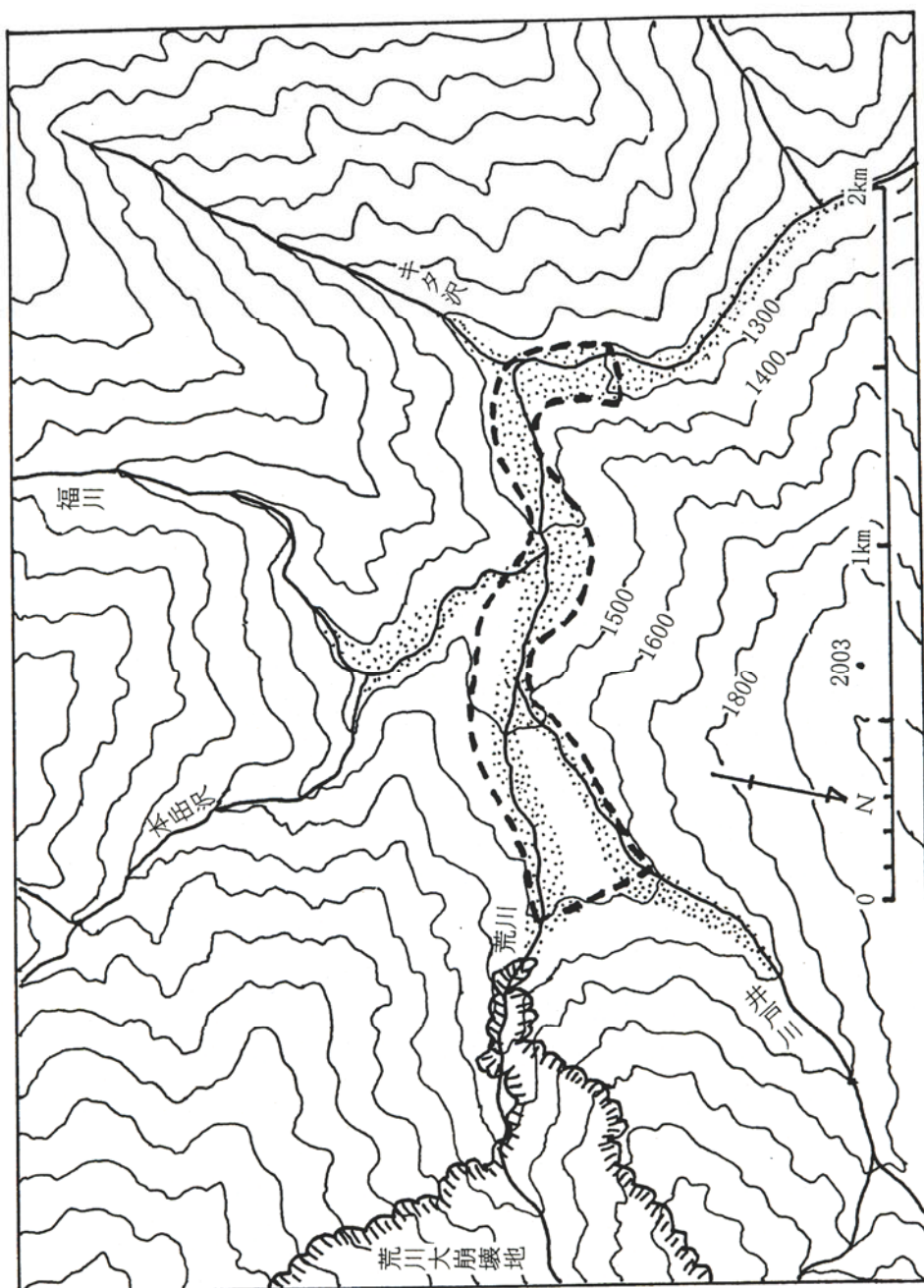


図4 現在の広河原と周辺地形図



図5 宝暦十三年大河原村御樽木山嶽惣絵図(9)

文字はほぼ同じ位置と大きさと入れ替えてある。(a)～(d)は付紙の位置で、書かれている文字は本文参照。(原図縦40cm、横60cm)